良忠『観経疏伝通記』における仏土理解について

沼倉 雄人

善導は『観経疏』において「是報非化」（浄土三帰一〇頁）下と述べ、阿弥陀仏の仏土は報身仏土であり、四十八願を因として成立し、さらにその報土は凡夫を含み五乗が阿弥陀仏の本願力によって齊しく往生する浄土であるとしている。善導は阿弥陀仏の仏身仏土について、三身論に依拠し仏土論を展開しているが、凡夫の報土往生を許さない当時の理論に反駁し、善導は阿弥陀仏の本願による凡夫報土を示した。この善導の報身仏土説は法然においても受容されていることから、南都における『安養報化』という阿弥陀仏の仏土に関する論義である。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠と南都仏教の関係については先学の教義の立場が意識されていた点が見受けられる。良忠編とAnnotations of the Commentary on the Gosho of the Pure Land (3月号第25卷)に於ける注釈は引用典籍などから考え、南都系の教義の立場が意識されていた点が見受けられる。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に師事したとされ、良忠と南都仏教の関係については先学諸氏も指摘するところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏の指摘でも指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘するとところである。本論では、阿弥陀仏の浄土についての先学諸氏も指摘するところである。良忠は唯識について法相宗の碩学である和田の良遍に関心をも指摘する。
良忠『観経成伝通記』における仏土理解について

三

「阿弥陀仏の本願」という要素によって凡夫の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二

三

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

四

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

五

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

六

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

七

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

八

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

九

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十一

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十二

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十三

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十四

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十五

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十六

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十七

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十八

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

十九

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十一

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十二

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十三

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十四

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十五

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十六

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十七

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十八

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

二十九

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十一

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十二

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十三

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十四

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十五

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶にとっては本願力によっても凡夫の報土往生は認められるものではない。阿弥陀仏の理仏を仏土に仏土と

三十六

の報土往生が可能であると主張するが、貞慶って
先に述べたように、仏陀の浄土信仰に焦点を当てた論文について触れた。浄土経典の研究を進め、特に「阿弥陀經」の解釈を根拠として、浄土仏陀の教義の役割について解説した。

浄土経典は、仏陀の教義に基づくものであり、特に「阿弥陀経」は浄土仏陀の実在を証明する重要な文献である。この経典は、浄土仏陀の人間を象徴する関係者としての役割を担っている。これにより、浄土仏陀の教義は、人々に浄土信仰を促すものであると言えよう。

また、浄土仏陀の教義は、仏陀の教義を拡張するものであり、仏陀の教義の役割をより広く解釈するものである。浄土仏陀の教義は、仏陀の教義に基づくものであり、特に「阿弥陀経」の解釈を根拠として、浄土仏陀の教義の役割について解説した。